

主体的・自律的に考える子どもを育てるNIEカリキュラム開発の視点と小学校における開発事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺尾, 健夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/8265

主体的・自律的に考える子どもを育てるNIEカリキュラム開発の視点と 小学校における開発事例

福井大学教育地域科学部 寺尾 健夫

本研究の目的は、①主体的・自律的に考える能力を育成するNIE (Newspaper in Education) のカリキュラムを作成するための基本的視点を明らかにすること、および②明らかになった視点に基づいて小学校のNIEカリキュラムを開発して示すこと、である。NIEのカリキュラムは、教科や総合的な学習の時間の中で分散して行われる個別のNIEを体系的なものにすることで作成できる。そのカリキュラムは<1>学年や学校段階に配置されるNIEとしての単元と、<2>学年や学校段階に応じてレベルアップしながら育成していく能力の種類や配置、の2つを基準として作成できるものであり、そのモデルは「NIE学びのステップアップ表」にまとめられる。NIEカリキュラム作成のための基本的視点を適用して開発されたカリキュラムの具体的事例を示すと福井県大野市上庄小学校の事例のようになる。

キーワード：NIE, カリキュラム, 思考力, 読解力, 資料活用力, 市民性

1. NIEとは

「NIE」(Newspaper in Education) は近年、新聞で実践例や研究会の活動などが頻繁に紹介されるようになってきており、教員や一般の社会人に認知されるようになってきている。また、小学校、中学校においては2008年(平成20年)に改訂された学習指導要領の中で教科や総合的な学習などで新聞を活用した学習が推奨されたこともあり、教育委員会主催の教員研修会でもNIEが取り上げられるようになってきた。そのため、NIEに対する教員の関心も高まってきているように思われる。しかしながらNIEの先進地である欧米の諸国¹⁾に比べてNIEの認知度はまだまだ低く、多くの教師の理解は、「NIEとは、教科の授業や総合的な学習の中で新聞記事を活用できる場面で適宜活用する指導法のこと」といった漠然としたものに留まっているのが実状ではないだろうか。

NIEの解説書の中でも、この言葉は直接的には「教育における新聞活用」あるいは「教育に新聞を」と訳され、その定義として今日では一般に、「新聞を生きた学習材として授業に活用することを主眼に教育界と新聞界が協力して行う運動」²⁾と定義されている。確かにこの定義は教育における新聞活用の意義や内容を社会一般の人々が共通に理解できるものとなっている。しかし一方で、この定義は漠然として曖昧であるため、「NIEとは何か」が不明確で、どの様な学力の育成が可能なのか、またどの様な方法で行えばよいのかがわかりにくい。

ではどの様に定義づければよいのか。端的に言えば、「NIEとは、新聞(記事)を教材にして子どもに一定の能力を育成しようとする、意図的・計画的な教育活動」である。

「一定の能力」の内容としては、基本的・概括的なも

のとして以下のような能力がある。

「興味・関心」

「読解力」

「問題発見力」、「探求力」、「情報活用力」、「問題解決力」、
「情報を批判的に見る力」

「意思決定力」、「価値判断力」

「社会提案力」、「社会参画力」(市民性)

人生という長期的なスパンで見れば、これらの能力は、子どもたちが現在やこれからの社会を生きていく上でたいへん重要となる力である。NIEの最大の教育的意義は、このような能力の育成に結びつく高い効果と大きな可能性を持っていることであると言えよう。

上に示した基本的・概括的能力は各教科や総合的な学習の具体的実践においては、その教科の特性や固有性を考慮した具体化された能力となる。

教師にNIEの本来の意義を広く理解してもらうには、「NIEとは何か、どの様なものか」を「一定の能力を育成するための指導計画」として示す必要がある。

ではどの様な手順でアプローチすればよいか。その答えは、「NIE学びのステップアップ表」を作り、当面はこれを基準として指導を行う体制を作ることである。以下、もう少し順序立てて説明していく。

各教科の教育内容や教える段階について学年や学校段階といった長期的スパンで全体像を示す場合には、「国語のカリキュラム」、「社会科のカリキュラム」といった用語を使う。カリキュラムとは一般に「教育課程」と訳され、小・中・高校といった学校段階や学年段階における子どもの発達特性を考えに入れて、それぞれの段階でどの様な能力をどの様な筋道(ステップ)で育成すればよいかを示した計画表のことである。カリキュラムは、総合的には学習指導要領として各教科や総合的な学

習の時間のものが作られており、これをもとに作られた素材が教科書である。そして教科書の中で、カリキュラムは一連の単元配列として示されている。

NIEを明確なものにするには、教科や総合的な時間と同じように、「NIEの」カリキュラムを作ることが現在最も必要なことであると思われる。またNIEのカリキュラムを示すことは、NIEとは何かを教員に広く、より具体的に理解してもらうよい方法でもある。

「NIEという言葉は聞くけれども、実際にはどう指導していったらよいか分からない。」このように、NIEは具体的な指導法が分からず、始めにくいように言われている。しかし、学校段階や学年を追って、新聞を教材として活用した教育活動を通して、どのような能力をどのような段階（ステップ）で育成するのかを明らかにして示した「NIEの」カリキュラムが示されると、教師には大きな助けになると考えられる。なぜなら、カリキュラムは教育指導の際に中核的な基準となるものだからである。

しかし残念ながら現在のところ、NIEが独立した教科として学校教育に取り入れられる状況にはない。そのため、現実にはさまざまな教科や総合的な学習の中で分散的に行う方式をとらざるを得ないだろう。

ただし、分散的な方法をとる場合の問題点は、各教師がNIEの授業の意図・目的を明確にしないまま、場当たりの授業をせざるを得ない場合がおきてくるということである。そこで、各教科や総合的な学習の時間の中でNIEを行う際に重要なことは、NIEの各授業が、小・中・高等学校を通じて総合的に見た場合に、全体としてNIEの「体系的」カリキュラムを成したかたちで行われることである。

NIEが必要とされるのは、子どもたちが、主体的で自律的に生きていくために不可欠な能力を身につける上でNIEが大きな役割を果たしてくれるからである。新聞は、子どもたちが生活している今（現在）と、ここ（地域・日本・世界）で起こっている出来事を文章や図表、写真のかたちで伝えてくれる。また、知識や経験のある人々の体験や考え方を生き生きと伝え、それらをもとに子どもが自分で考える素材を提供してくれる。したがって、NIEはこれからの社会を主体的、自律的に生きる「考える人間」を育てるものとして大きな役割を果たすものとも言える。

NIEでは、具体的には①興味・関心、②問題発見力、③読解力、④情報活用力、⑤探求力、⑥情報を批判的に見る力、⑦社会への提案力などの能力を育てることができる。このような能力は、混迷の時代と言われる現代や未来の社会において生きていくために不可欠の能力である。社会で活躍するための準備段階にある小、中、高等学校の子どもたちこそが、学校段階で集中的にしっかりと身につけておくことが強く求められる。

2. 「NIE学びのステップアップ表」で子どもの能力を育てる

前項1.の末尾で述べたように、現在の学校教育の中では、NIEは教科や総合的な学習の時間の中で分散的に行わざるを得ない。しかし、分散的なものを総合すればNIEのカリキュラムとして表すことができる。図表で示せば、視覚的な助けのある、より理解しやすいものとなるだろう。教科の枠の下で作られているカリキュラムから、NIEに関係する部分を切り取って再構成してできるカリキュラム、これはヴァーチャルな（仮想）カリキュラムと言ってもよいだろう。NIEのカリキュラムはヴァーチャルなカリキュラムとして表せるものなのである。

例えば、「一定の能力」を「どのような学年・学校段階」で順を追って系統的に育てるのかを縦横二軸の表で示したもの、あるいはひとつの学年で「どのような単元」学習を順次行って、「一定の能力」をレベルアップ（ステップアップ）させながら伸ばしていくのかを縦横二軸の表で示したもの、などである（例えば、表1-1に示した福井県大野市立上庄小学校のNIE指導計画表など）。

どのような図表でカリキュラムを表そうとも、共通するのは「どのような能力」を「どのような道筋」で育てるのかということである。この点を分かりやすく示したのが、表1の「NIE学びのステップアップ表（図）」である。

次ページに示した表1では横軸に学びのステップを、縦軸には小学校低学年から高等学校までの間で、下から上へと順に想定される単元を配列している。

また、縦軸と横軸の2軸で構成される面（第一象限）は小学校から中学校に渡ってNIEで育成を目ざす能力を楕円で示し、学年や学校段階を経るにしたがってどのような能力に焦点を当て、どのような時間的スパンで育成するのかを示している。

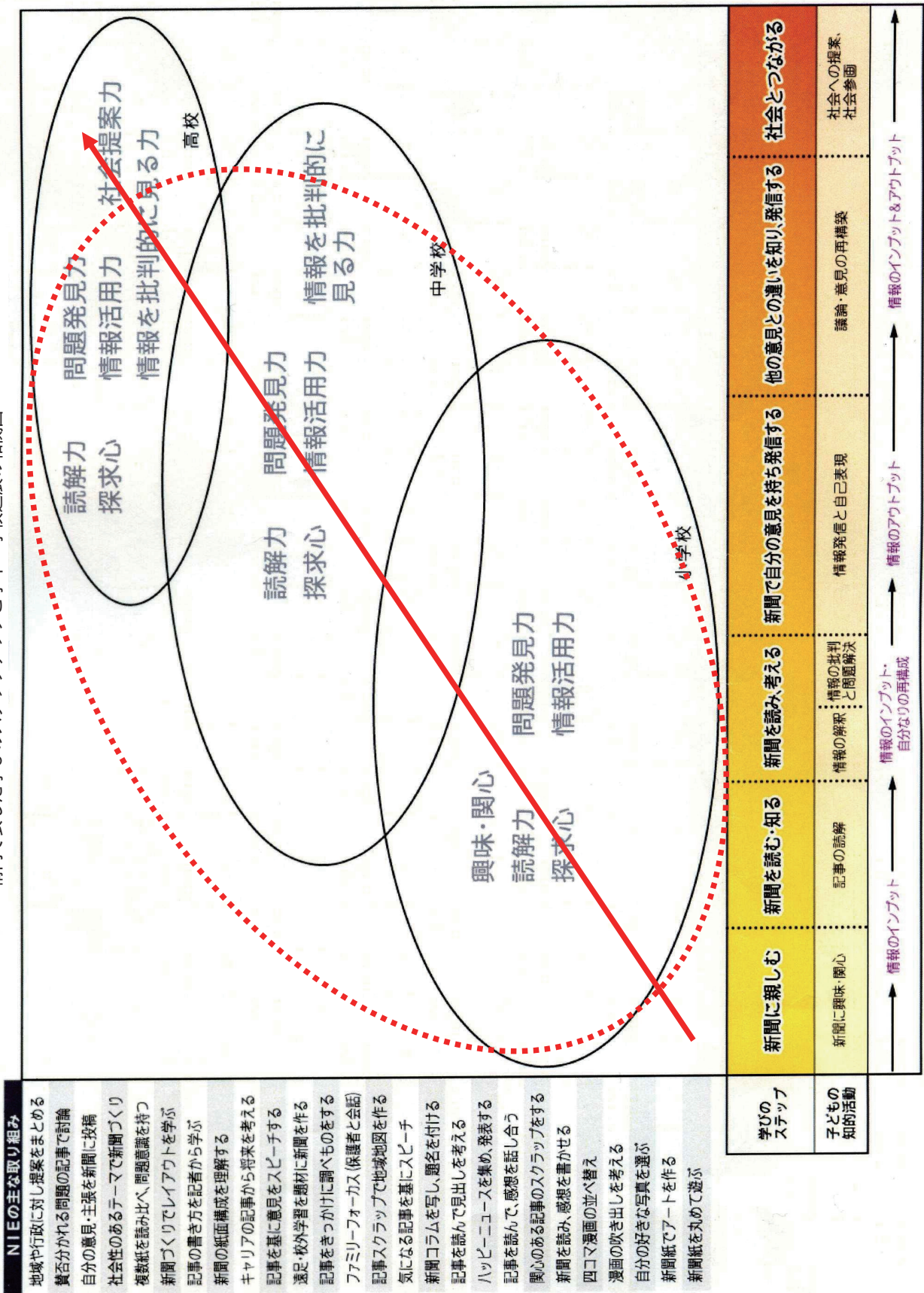
このような学びのレベルアップ（ステップアップ）の段階を踏まえたNIE学びのフレームワーク表があると、教師のNIE理解の中に位置づいた指導基準ができ、NIEによって子どもたちのどのような能力をどのような方法で指導すればよいかのかが明確になる。「NIE学びのフレームワーク表」は、NIEの指導に際して教師の重要な指針となるだろう。

本稿で提案するNIEのカリキュラムでは、小学校の6年間、中学校、高等学校の6年間の合計12年間で次のような6段階で学びをレベルアップさせていくようになっている。

- 〈1〉新聞に親しむ。
- 〈2〉新聞を読む・知る。
- 〈3〉新聞を読み、考える。
- 〈4〉新聞で自分の意見を持ち、発信する。
- 〈5〉他の意見との違いを知り、発信する。
- 〈6〉社会とつながる。

これら6段階のステップと連動して、①興味・関心、②問題発見力、③読解力、④情報活用力、⑤探求力、⑥

表1 NIE学びのステップアップ表
～精円で表した学びのステップアップと学年・学校進展の相関図～



- NIEの主な取り組み**
- 地域や行政に対し提案をまとめる
 - 賛否分かれる問題の記事で討論
 - 自分の意見・主張を新聞に投稿
 - 社会性のあるテーマで新聞づくり
 - 複数紙を読み比べ、問題意識を持つ
 - 新聞づくりでレイアウトを学ぶ
 - 記事の書き方を記者から学ぶ
 - 新聞の紙面構成を理解する
 - キャリアの記事から将来を考える
 - 記事を基に意見をスピーチする
 - 遠足・校外学習を題材に新聞を作る
 - 記事をきっかけに調べものをする
 - ファミリーフォーカス(保護者と会話)
 - 記事スクラップで地域地図を作る
 - 気になる記事を基にスピーチ
 - 新聞コラムを写し、題名を付ける
 - 記事を読んで見出しを考える
 - ハッピーニュースを集め、発表する
 - 記事を読んで、感想を話し合う
 - 関心のある記事のスクラップをする
 - 新聞を読み、感想を書かせる
 - 四コマ漫画の並べ替え
 - 漫画の吹き出しを考える
 - 自分の好きな写真を選ぶ
 - 新聞紙でアートを作る
 - 新聞紙を丸めて遊ぶ

情報を批判的に見る力, ⑦社会への提案力などの能力を徐々に育てていく。これらの能力は, ①から⑦へ向かって, 基礎的な能力からより高度な能力へと階層的な順で並べられており, 能力発展の段階ともなっている。

ここでは以下の点に注意すべきである。すなわち, 番号の小さい能力, 例えば「①興味・関心」が身についたら, 後の学年や学校段階ではこの能力の育成がもはや必要でなくなるというのではなく, 既に習得した能力を継続的に活用・発展させながら, 学年や学校段階を追って, より高いレベルの能力(番号のより大きい能力)を育成するように指導の重点を移していくということである。この過程は, 既習の能力を土台としてさらに高度な能力の育成を目標としているのである。学年や学校段階が上がれば上がるほど, 重点的に育成する能力は, 左の①から右方向に②→③→④→⑤→⑥→⑦と, より大きな番号の付いた能力へと育成の重点を移していくことになる。

NIEを展開する際には, 教師は, たとえひとつの学校段階の特定の学年の教科, あるいは総合的な学習の時間を担当していても, 頭の中では上記のようなNIEの

カリキュラムを思い描き, 自分がNIE学びのステップ表の中のどの部分を担当しているのかを意識して, 子どもの能力育成を意図的・計画的に展開していくことが重要である。

3. 新聞と取り組むことでさまざまな能力を広げる

「NIE学びのステップアップ」の基礎にあるのは, 子どもたちの情報との関わり方に十分配慮し, 支えとなる能力を幅広く伸ばしていくという考え方である。それには大きく分けて3つ構成要素がある。①情報のインプット, ②「情報のアウトプット」, それに頭の中での活動である③「思考・判断」である。これら3つの要素で能力をとらえることが極めて重要であると指摘しておきたい(図1参照)。図1では, これらの3つの構成要素のそれぞれを3列に分けて表している。

NIEにおいては, ①「情報のインプット」は「読む」「見る」といった行為を通して外界(新聞)と関わりをもとにして行われる。「情報のインプット」で働く能力を示すと, 図1の一番左の列のようになる。

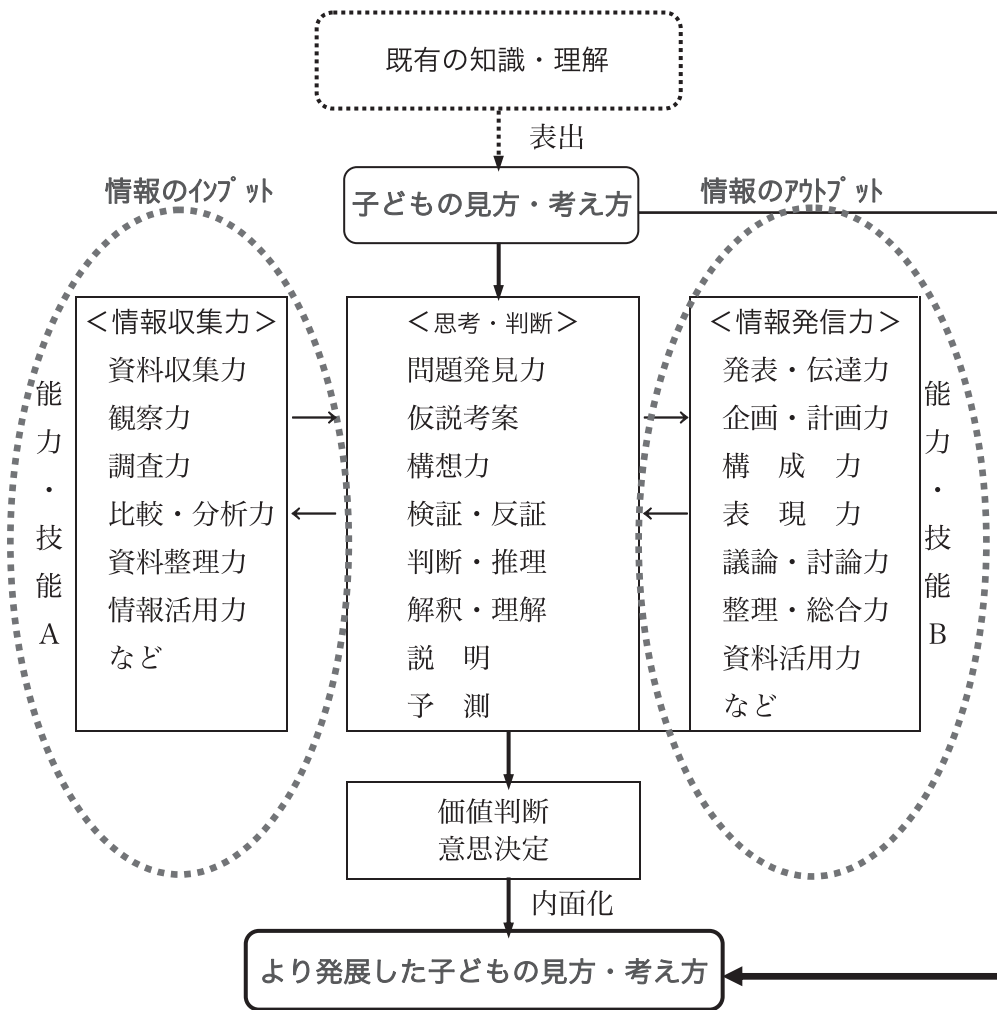


図1 NIEにおける能力の広がり

一方、②「情報のアウトプット」は、「声に出して自分の考えを説明する」とか、「自分の考えを文章に書く」、あるいは「資料や新聞を作成し、表現する」などといったような、「行為を通した外界との関わり」をもとにして行われるものである。「情報のアウトプット」で働く能力を示すと図1の一番右の列のようになる。

「情報のインプット」と「アウトプット」では、頭の中の「思考・判断」だけでなく、五感をフルに活用し、言語を通したり、資料を手がかりとしたりして、友達と交流するような行為も行われる。目や耳、それに手、腕、さらにはこれらを組み合わせた身振りなど身体をフルに使う「技能」が不可欠となる。

「情報のインプット」と「情報のアウトプット」の間には、最も重要な部分として、情報を基にして子ども自身が③「思考や判断をする」という頭脳の活動がある。③「思考・判断」で活用される能力を図示すると、図1の中央列のようになる（図1参照）。この列に示される能力は、問題解決に関わる能力や意思決定、価値判断の能力である。これらの能力は社会参画の能力や市民性の育成へと発展していくものとなっている。

図1では左右や縦方向の矢印で示したように、それぞれの能力が関わり合う作用としては「左右の相互作用の方向」が、また能力が発展する流れとしては「上から下への方向」がある。この様な能力を左右や縦方向へと縦横に活用できるようになることで能力の幅が広がり、子どもたちは主体的、自律的に「考える」ようになり、実社会とつながる社会参画の力や主体的で自律的な市民性（シティズンシップ）を身につけていけるのである。

4. 新聞を使って「読解力」を育てる

前項の3.では、新聞を活用することでさまざまな能力を幅広く伸ばすことができることをみてきたが、NIEではとりわけ「読解力」の育成に対して大きな効果が期待できる。しかし一言で「読解力」と言っても、その種類や質には多様なレベルがあり、どの様な読解力をどの程度まで育成するのかを明らかにしておく必要があると思われる。また、読解力の育成のためには、小学校から中学校、高等学校にわたって、子どもたちの発達段階や能力の特性に合わせて順次、段階的な指導を行っていかなければならない。

そこでここでは、読解力を向上させる指導指針として、大まかなものではあるが、各学校段階や学年段階でどの程度の読解力が身につけばよいか、その読解力の質を8つの段階とレベルに分けて示した。なお、読解力に関しては、とりわけ国語においてはより詳しい分析ができると思われる。しかしNIEはすべての教科に関わるものであるため、ここでは教科や総合的な学習に共通する読解力の内容として考えられる読解力の内実を質のレベルを8つの段階で示すことにした（図2参照）。

教師は、これをひとつの指針として、自分が担当する学校段階や学年において子どもたちに「どの種類の読解力をどの程度まで育成すればよいか」を判断し、読解力育成を意図的・計画的に行っていく過程に位置づいた、すなわちNIEのカリキュラムに位置づいた指導を行って欲しい。

5. 小学校のNIEカリキュラム開発

本稿の項目1～4でこれまで説明してきたのはNIEカリキュラム作成のための基本的な視点である。NIEのカリキュラム開発ではこれらの視点に基づいて、どの様な能力をどの様な段階で子どもに育成していくのかを学年や学校段階といった期間幅で示された計画表として作ることが必要である。より具体的には、教科や総合的な学習の時間のどの様な単元をNIEの単元として位置づけるのか、NIEの単元として位置づくさまざまな単元を学年や学校段階を見通して発展的に位置づけると、どの様な学力がどの様な段階で育っていくのかが分かるような表として示す必要がある。このような要請に端的に答えるものがNIEカリキュラムなのである。

最後に、本稿で説明してきた、NIEカリキュラム作成の基本的視点に基づいて開発された小学校のNIEカリキュラムを紹介する。

表2に示したのは、福井県大野市立上庄小学校が開発したNIEカリキュラムである³⁾。

この表では横軸にNIEで育成したい能力を示し、左から右へとその能力のレベルが次第に高いものが示されている。それらは以下のような能力である。

- ① 社会への興味関心
- ② 思考力
- ③ 判断力
- ④ 表現力

また縦軸には、小学校第1学年から6学年までの時間的スパンをとり、上部から下方へと向かって、各学年の教科や総合学習の時間においてNIEとして位置づけられる単元を配列してある。

この表の縦軸と横軸とがクロスする部分、つまり当該単元でどの様な能力が育てられるか（あるいは、当該の能力はどの学年のどの様な単元で育成されるか）を示したのが、表の中で○を付けている部分である。例えば、第1学年の単元「しんぶんであそぼう」について見ると、この単元のある行を横に見ると、いくつかの○が付いている。この○が付いている部分を横軸に示された能力の尺度で見ると、「新聞で育てたい力」の中の「社会への興味関心」それに「思考力」の能力に対応している。つまり、単元「しんぶんであそぼう」は「社会への興味関心」、「思考力」といった能力を育てることを使命としているわけである。もちろん小学校第1学年であるから、能力と言っても基本的レベルに留まっているであろう。しかし、能力の育成は学年を追う毎にレベルアップしていく

ように意図的に計画されているのである。

次に、上庄小学校のNIEカリキュラム表をよりマクロな視点に立って見てみよう。こうすることで、カリキュラムに組み込まれた能力育成のためのより大きな方略を読み取ることができる。

表2では、能力育成のマクロな方略が分かり易くなるように、表には左上から右下に向かって延びる楕円を添え書きするとともに、同じく左上から右下に向かって矢印を書き添えた。

これら「楕円と矢印」と先に指摘した各単元で育成を目指す「能力」を記した○の位置、集まりの傾向に着目してもらいたい。表を大局的に見ると、能力の育成（○の付いた箇所）が左上から右下に向かって展開すると共に、右下に進むほど○の数が密になっていることに気づ

くだろう。このことから、このNIEカリキュラム表では、学年が進むに従って、育成する能力の種類もより高度なレベルにある能力へと変化し、「思考力」→「判断力」→「表現力」へと能力育成の重点が移っている。ここでは「思考力」の育成の上に「判断力」を、さらに「判断力」の育成の上に「表現力」をと、前の段階で育成した能力の上にさらに新しい能力を積み重ねて伸ばしている。これは階層的・発展的な能力育成の方略と言える。したがって、上の学年になるほど以前に重点を置いて育成した能力に習熟し、その活用がより自在に出来るようになることが想定されているのである。

この小学校版のNIEカリキュラム表を、表1と対応させてみると、NIEのカリキュラム作成の基本的な考え方を正確に押さえていることが分かるだろう。

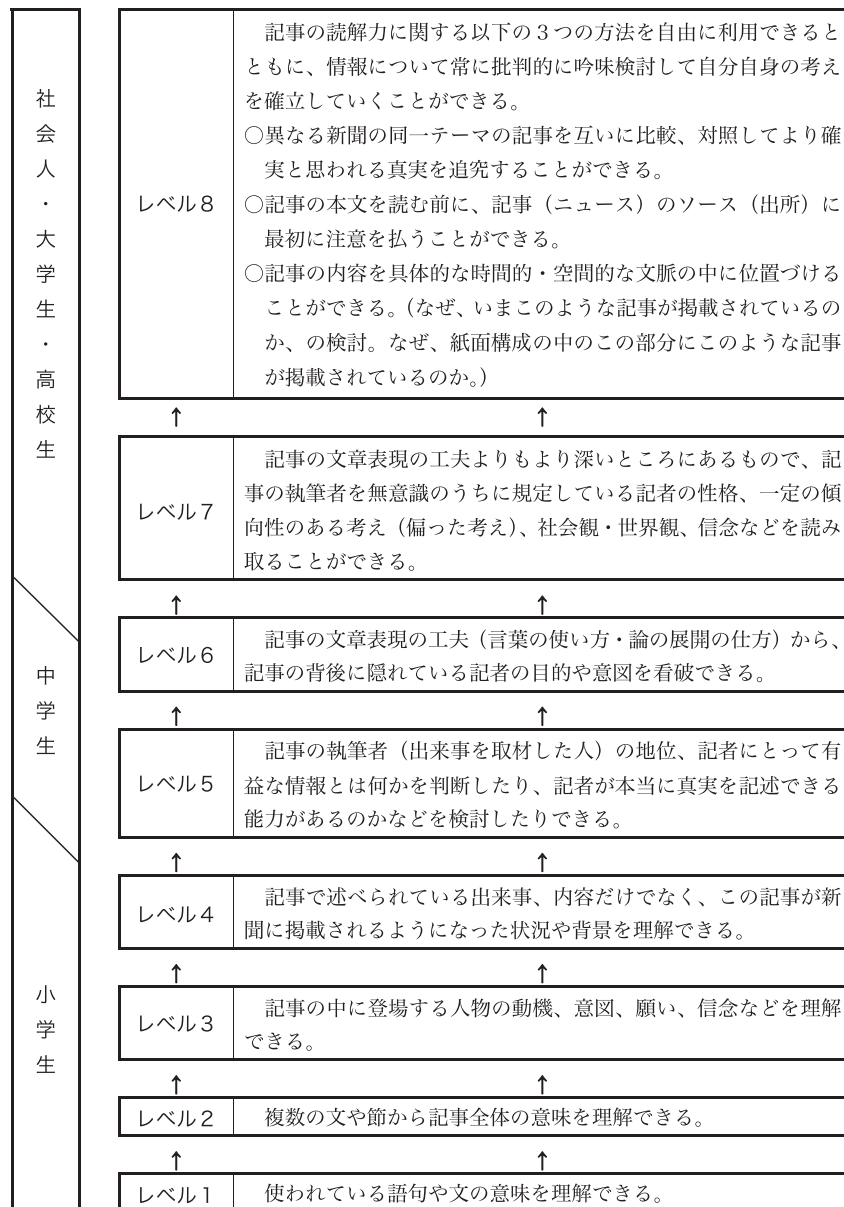


図2 記事の読解力の深まりの段階とレベル

このようなNIEのカリキュラム表は、担当する学年において教師がNIEでどのような能力を育成すればよいかを明らかにしてくれる。例えば、第4学年の子どもを受け持った教師はこの表を参考にして、第4学年で育成すべき能力と、NIEが行える単元を確認できる。そしてNIEのカリキュラムに位置づいた授業目標を決めて意図的・計画的な指導が出来る。また、第3学年までに子どもはどのような能力を伸ばしてきており、第5学年でどのような能力の育成へと繋がっていくのかを把握でき、目標を明確にできる。そしてよりの確かな指導ができるようになる。

NIEカリキュラムに定番のものはない。地域の特性によって少しずつ異なったものになるだろう。しかし、上庄小学校のようなかなり洗練されたNIEカリキュラムは、他校で新たにカリキュラムを開発する場合に模範となるモデルだろう。

初めは先進校のモデル⁴⁾を真似ることから始めるとよい。気軽にNIEを進め、自校に合ったNIEを実践していくことが、本当に効果の上がる実践やカリキュラムの創造に繋がっていくと考える。

註および引用文献

- 1) 妹尾彰『NIEの20年 “教育に新聞を”—その歩みと可能性を探る』、晩成書房、2004年。「第5章 海外のNIE」では米国、北欧諸国、英国、韓国、オーストラリアのNIEが紹介されている。
- 2) 妹尾彰「新聞と教育—NIEの視点から—」、日本NIE研究会『新聞でこんな学力がつく』、東洋館出版、2004年、p.7。
- 3) 上庄小学校のNIEカリキュラムは本稿で筆者が示し

た開発視点を基盤にして開発された。

- 4) 寺尾健夫編著『教職員のためのNIEガイドブック』(福井新聞社、2012年)の中では、本稿で説明しているNIEカリキュラム作成の視点に基づいて代表的なNIEの実践事例を以下の5つのタイプに分けて紹介している。

- ① 新聞に親しむための新聞活用
- ② 知識習得の情報源としての新聞活用
- ③ より豊かな情報を提供してくれる情報源としての新聞活用
- ④ 教科の指導目的の達成と強く結びついた、教材としての新聞活用
- ⑤ 新聞から知識(情報)を読み取り、それらの知識を活用し、関係づけて一定の問題を解決する能力を育成するための新聞活用

これらの実践は、福井県NIE推進協議会が選定したNIE実践校で行われたものである。実践の解説では、実践校の教師が既に行った実践結果を基にして、NIEの学習指導の効果や実践上の留意点も説明している。これからNIEに取り組む教師にとって指導のための有益な指針を提供している。

謝辞

福井県大野市上庄小学校では、本稿で提案したNIEカリキュラム作成の視点を参考にして、前校長の福田玲子氏、古川典子教諭を中心として学校全体で独自にNIEカリキュラム(NIE年間計画表)を開発していただきました。貴重な研究成果を本稿で紹介することに諒解をいただきました。心よりお礼申し上げます。

The Viewpoint for Developing the NIE Curriculum that Enables Students to Think Purposefully and Willingly and the Curriculum that was Formulated for Elementary School Students

The purpose of this study is, ① to clarify the viewpoint in formulating the NIE curriculum that enables students to acquire the ability to think purposefully and willingly, and ② to develop and show the NIE curriculum for primary school students, based on the clarified viewpoint.

The NIE curriculum is formulated by making each NIE lesson in each subject or in the Integrated Studies well-organized. The viewpoints in formulating the curriculum are as follows; (1) the abilities that students are supposed to acquire, and (2) the unit that includes the contents of studies and teaching materials which are made in accordance with students' developmental stages. The NIE curriculum is organized by using the two viewpoints above and it is shown in the chart called "The Chart of Stepping Up the NIE Learning"

I show one model case of the NIE curriculum that was developed by applying two viewpoints above in Kamishyo Elementary School in Ohno City, Fukui Prefecture.

Takeo TERAOKA

Key words : NIE, curriculum, the ability to think, the ability to read and understand, the ability to make use of materials